



本日の発表内容

I. はじめに: 歴史資料からみた災害列島日本

- ・研究方法: 過去帳、日記、地誌、絵図

II. 東日本大震災被災地の寺めぐり

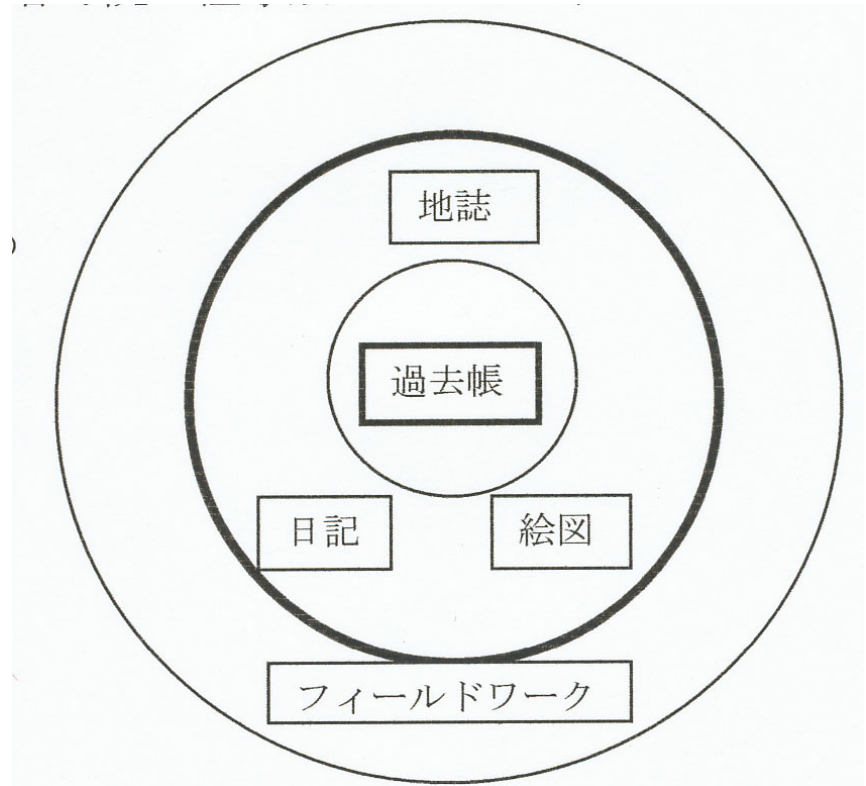
① 2012.11.9～11.13

② 津波対策:

やどかりプラン

III. 全国のお寺巡礼:

過去帳分析



日記の活用例

朝日文左衛門著『鸚鵡籠中記』

元禄4年(1691)～享保2年(1717)

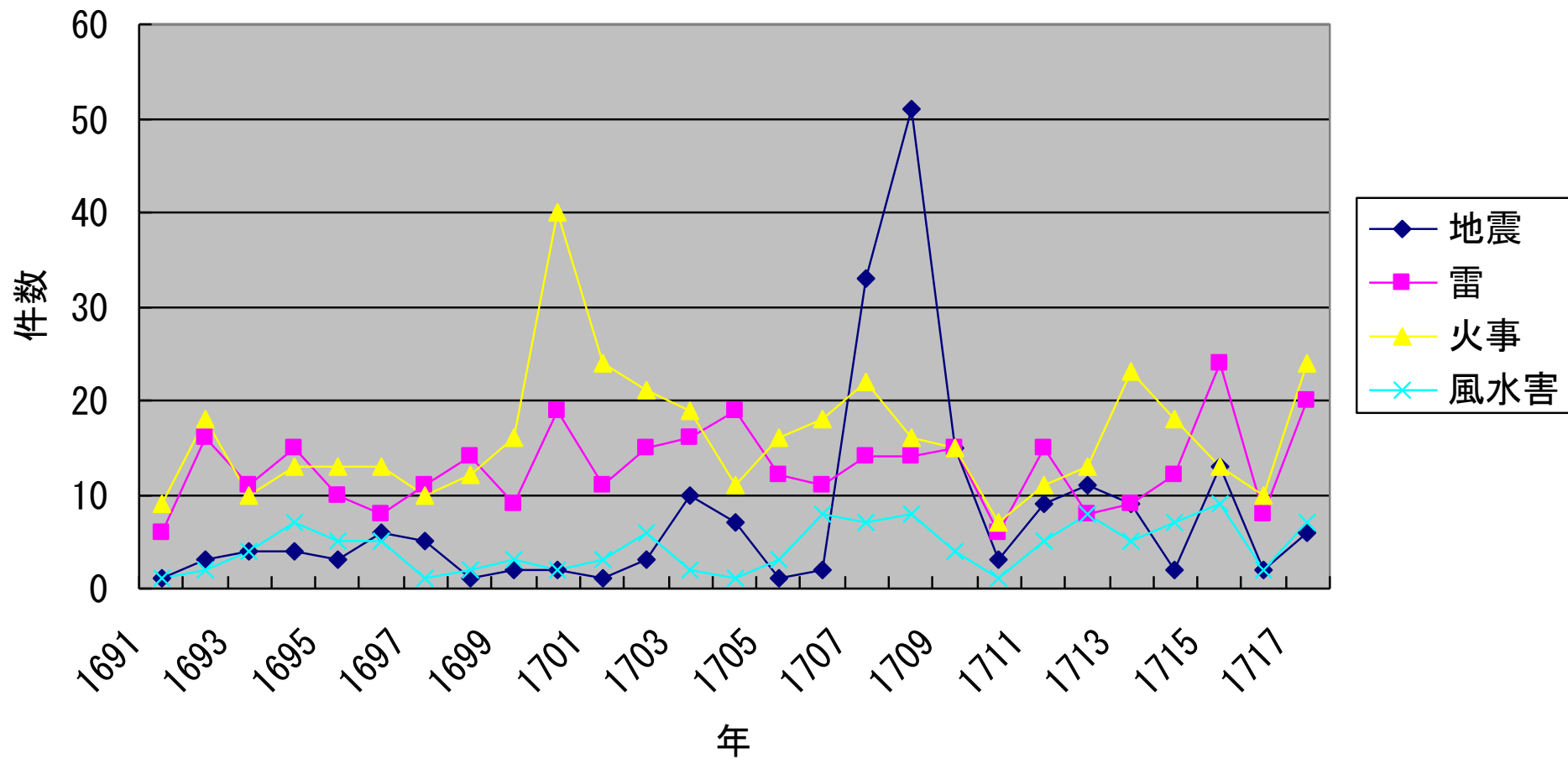


図1 『鸚鵡籠中記』記載の年別自然災害件数

• 「地震」記載： 宝永4年(1707.10.4) 5447文字

• 古田勝蔵並の屋敷のうら地裂て、泥水湧出づ。或地形五六尺づゝ沈む。此外水近き地は所々如此也

○清水にて、観音堂の側と又東がわと家十九軒潰る。家を並へたる内に如此は地形のあしきゆへか。先年蓮池を塵抹に埋めたる処如此歟。○枇杷嶋東の大橋、中程四五間柱沈む。六七寸余法界門及新屋(ニイヤ)堤裂崩。当分馬の往来無之。海辺の堤、所により百間より二三百間程宛、一つづきに潰れ泥水となる処多し。御領分中破損及潰るゝ堤、通計五千間余。○名古屋中にて地震にて疵を蒙る者一人もなし。況や死する者をや。

但し臨産等の病人を介抱せずして、死する者は間々あり

。其外尾の御領分中にて地震にて死する者未聞之。幸の又幸也。○竹腰山城守衆橋爪八右衛門内義、踏石にて頬をつよく破る。然れ共癒。○未の刻、大地震以後暮迄之間は大ゆりはなけれ共、地震する事甚度々也。○同夜予家内不寝也。予大方算ふるに、少づゝの共に暁迄六十度の余也。其内いかふ強きはなし。或は鳴りてゆるあり、不鳴してゆるあり、又鳴てゆらざるあり。合壁近隣等何も不寝。或は敷の辺へ縁取を敷て、外に宿する者も世上に多くあり。○熱田海等、甚だ潮甚高く、進退不常。新屋川等迄潮来る。○熱田

社内無事也○但し佐久間大膳大夫所建の大石灯笼西へ倒る。寛文寅には倒れず。地震の上に、熱田にて津浪来るとて、諸人大に驚騒ぐ。此時頭人の祢宜一人、神前に有しが、大麻を持行て、海辺へ出て観念し、大麻一をば手に擎て、一つは海へ抛入たるに、蕩々たる高浪一の杭迄来りしが、忽二つに割て其中より火の玉三つ飛て天へ上る。浪は智多の方へ横ぎれ行く。熱田へは少もレ不来。見たる者多くあり。



「尾府名古屋図」宝永6年(1709)



噴砂現場 (名古屋市北区 。元禄時代、古 田勝蔵の家)

撮影：読売新聞中部支社専門員
千田龍彦氏

* (参考)私の研究テーマ

- 江戸時代初期からの地域変遷史

＜主要資料＞

人口：宗門人別帳

土地：検地帳

- 余談：文左衛門の後妻すめの行動

すめは娘あぐりを出産する前に**2度の死産**を経験している。①1人目：**庭に埋めた！！**

②2人目：お寺で供養した。

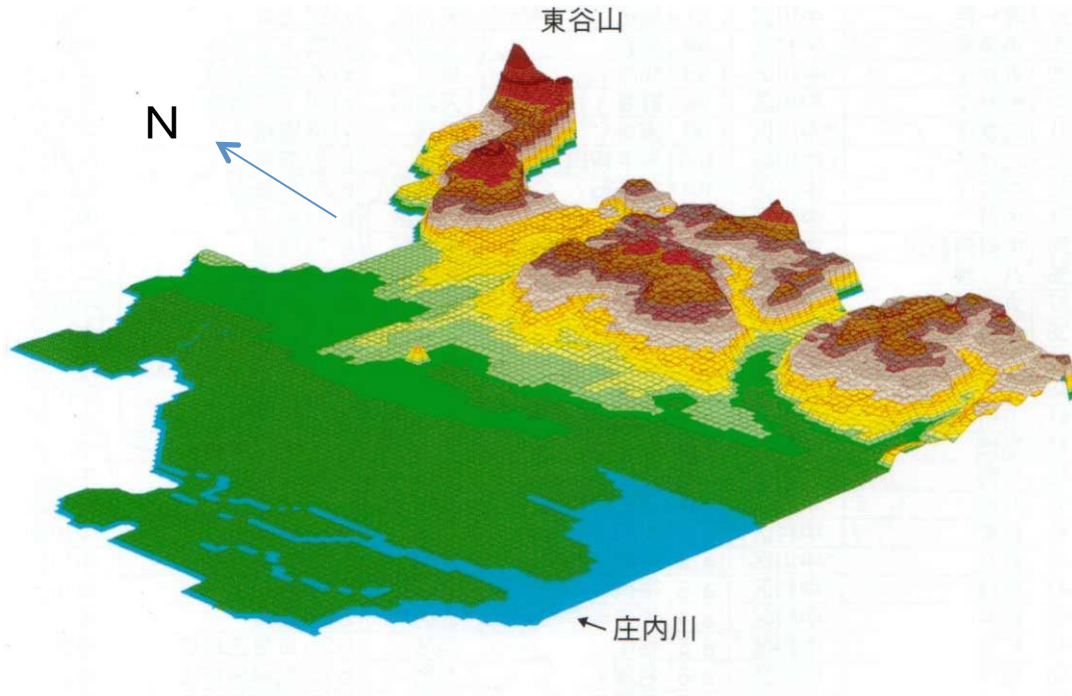
地誌の活用例:

①尾張:「寛文村々覚書」

「尾張徇行記」

②仙台:「安永風土記」

名古屋鳥瞰図（明治24年）



名古屋市の東部と西部でどちらに田が多いか？

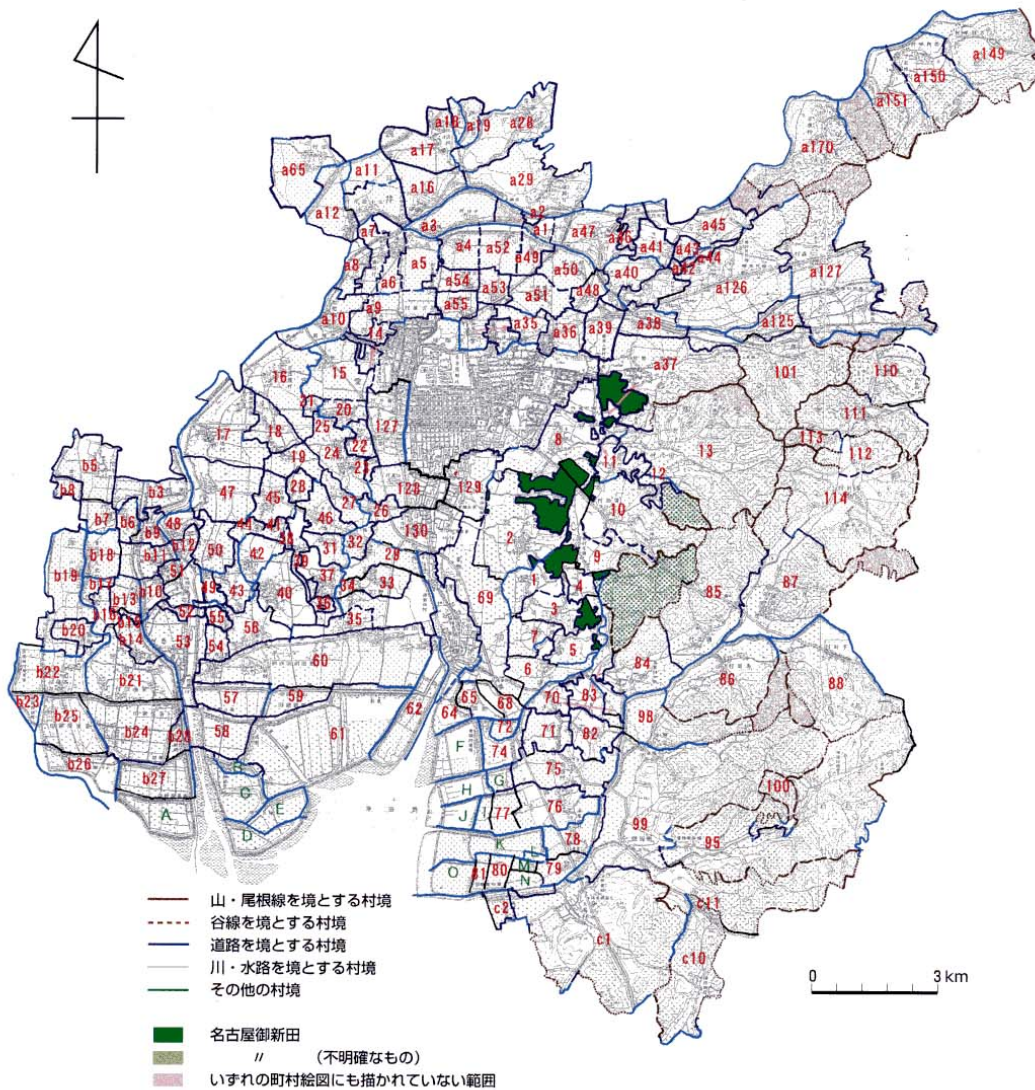


図3 『尾張国町村絵図』に記載された村々

村の境界図作成 * 文字情報をGIS で図化するため

- 注1) 本図は、明治の地籍図で村境が確定される以前の村境と飛地を、町村絵図から可能な限り復元したものである。
- 2) 文政5年(1822)から天保12年(1841)に干拓された新田：A 藤高前新田、B 神宮寺新田、C 宝来新田、D 永徳新田、E 稲富新田、F 道德前新田、G 又兵衛新田、H 当栄新田、I 宝生新田、J 宝生前新田、K 八左エ門新田、L 丹後江新田、M 後広新田、N 鳴海伝馬新田、O 基徳新田

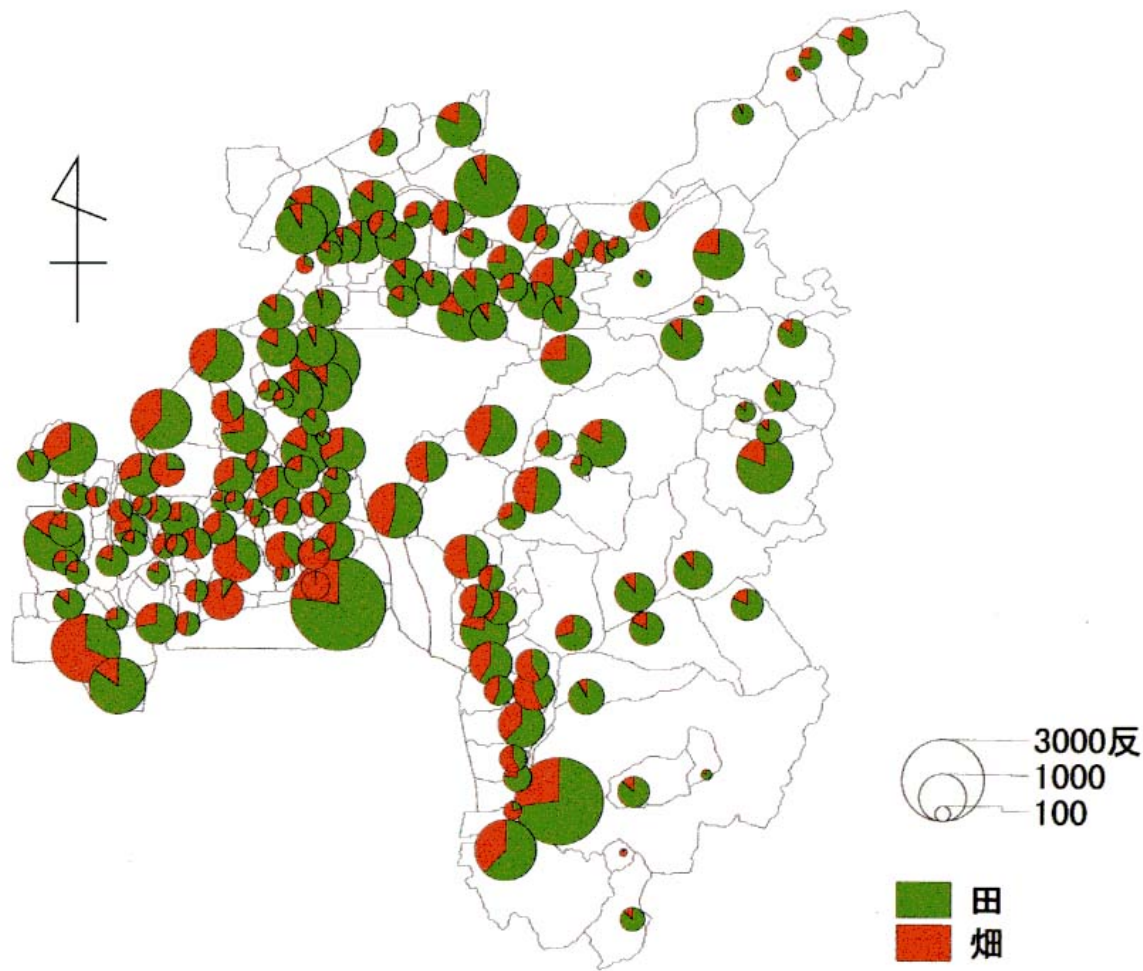


図6 田畑(1672)

注1) 名古屋城下、熱田町内はデータなし。

なぜ東部(丘陵地)に水田が多く、
西部(低湿地)に畑が多いのか？

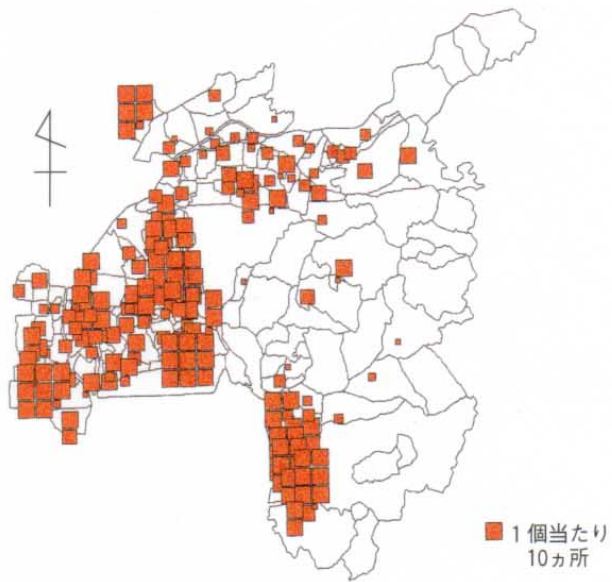


図62 杵(1672)

0 6km

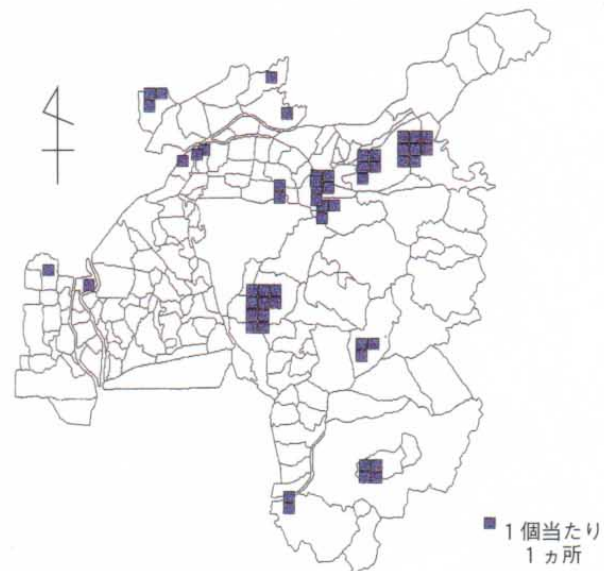


図63 井瀬木(1672)

0 6km

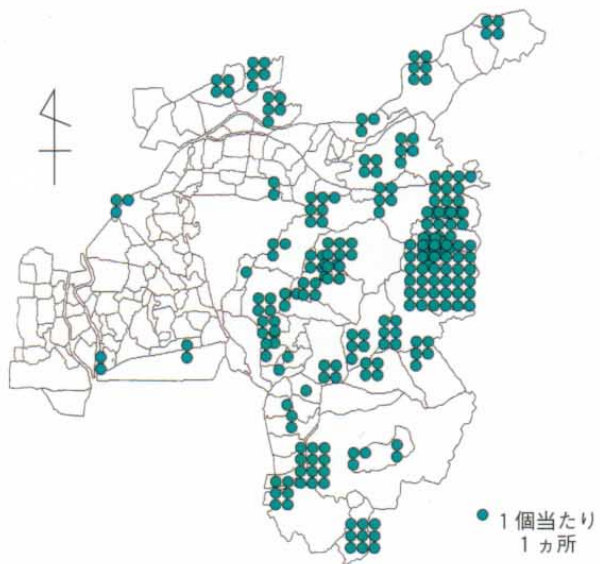


図65 雨池(1672)

0 6km

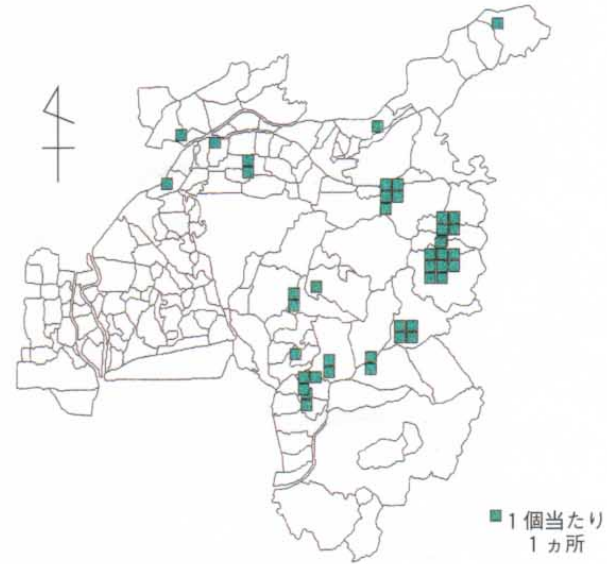
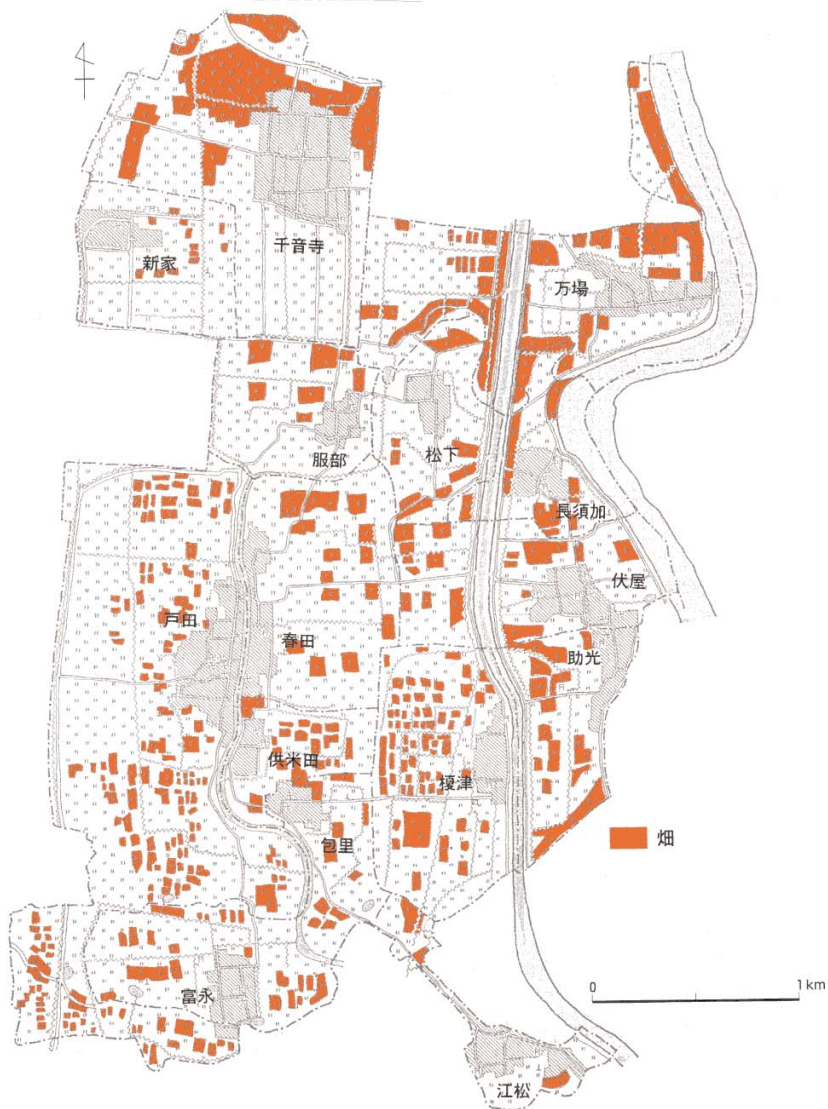


図64 井(1672)

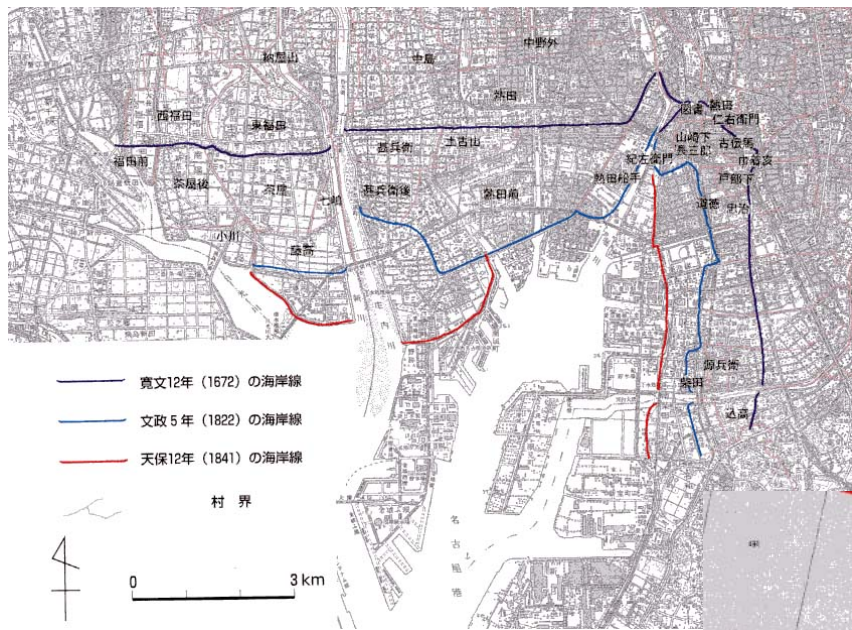
0 6km



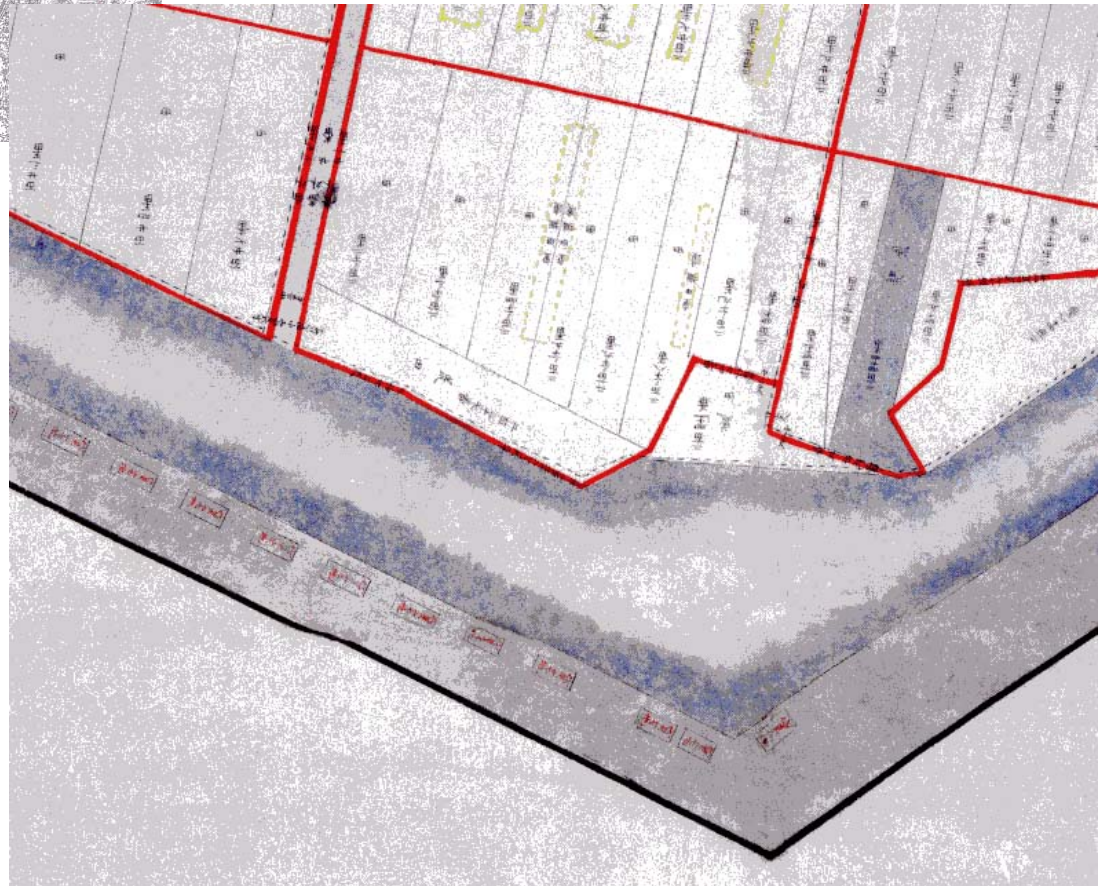
島畑







干拓地にも島畑



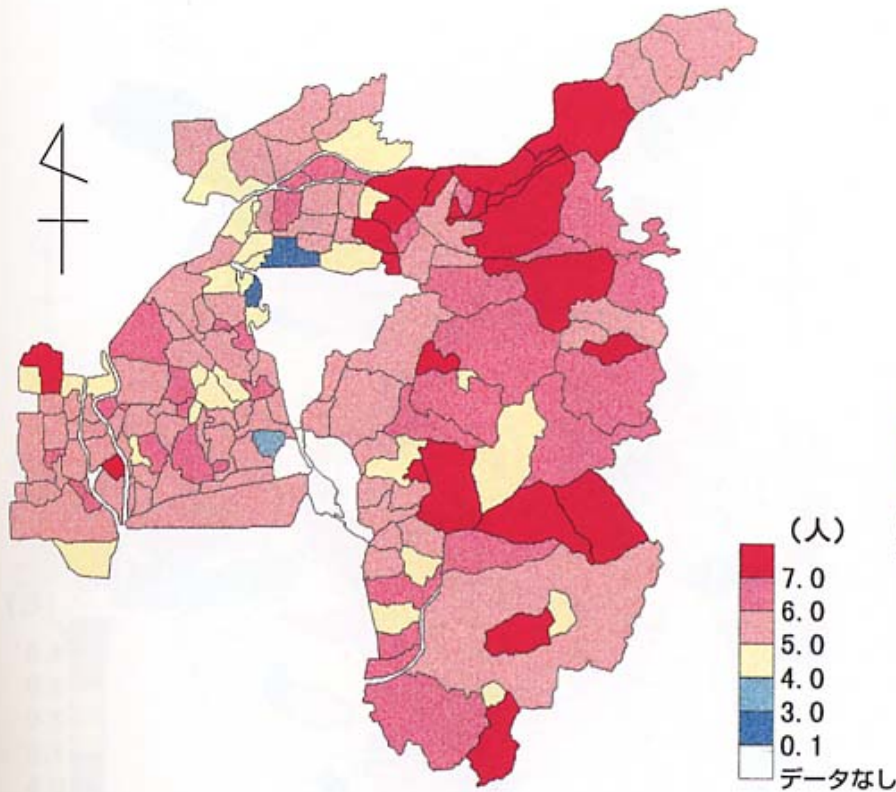


図25 1戸当たり世帯員数 (1672) 0 6km

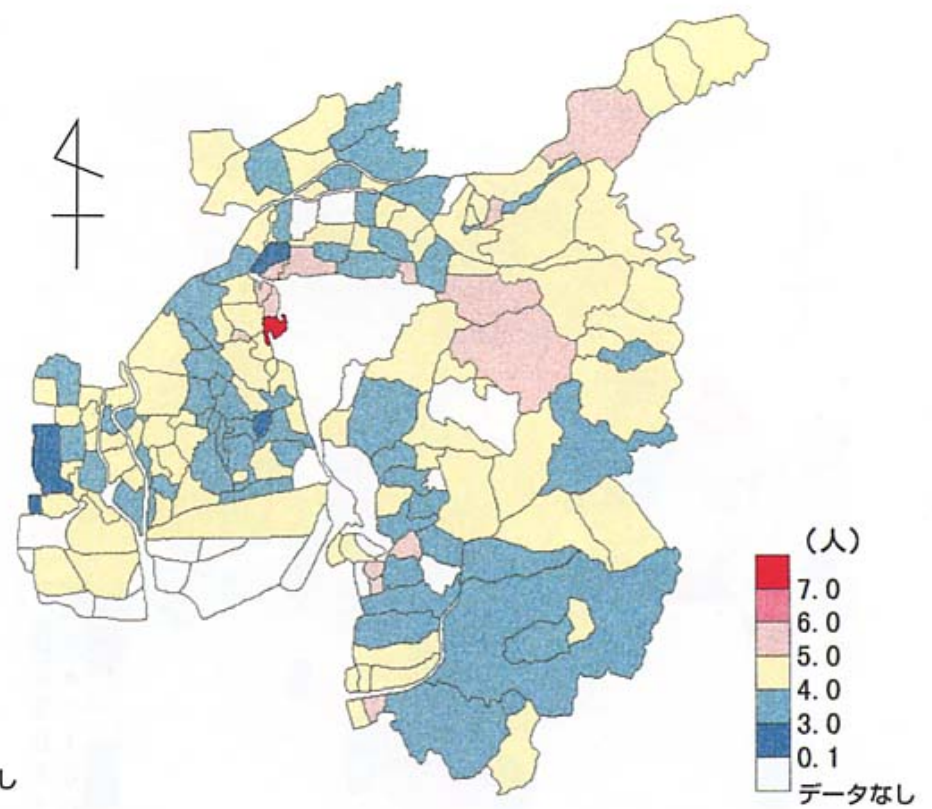


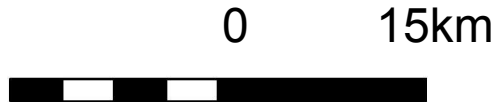
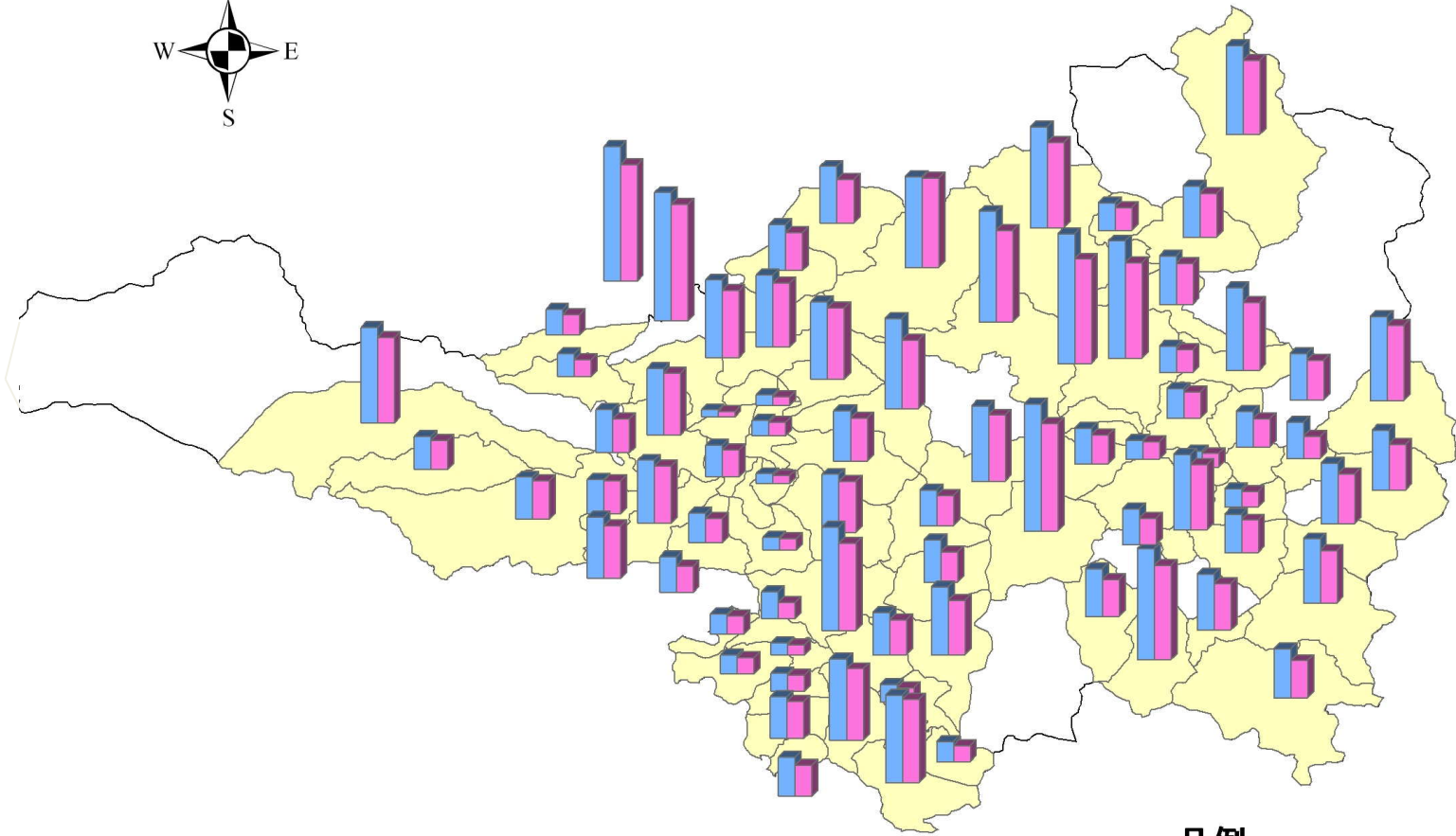
図26 1戸当たり世帯員数(1822) 0 6km

江戸時代後期の核家族化

『安永風土記』にみる 仙台藩村落の人口と民力



御領分絵図 磐井郡部分



凡例

性比: 磐井郡

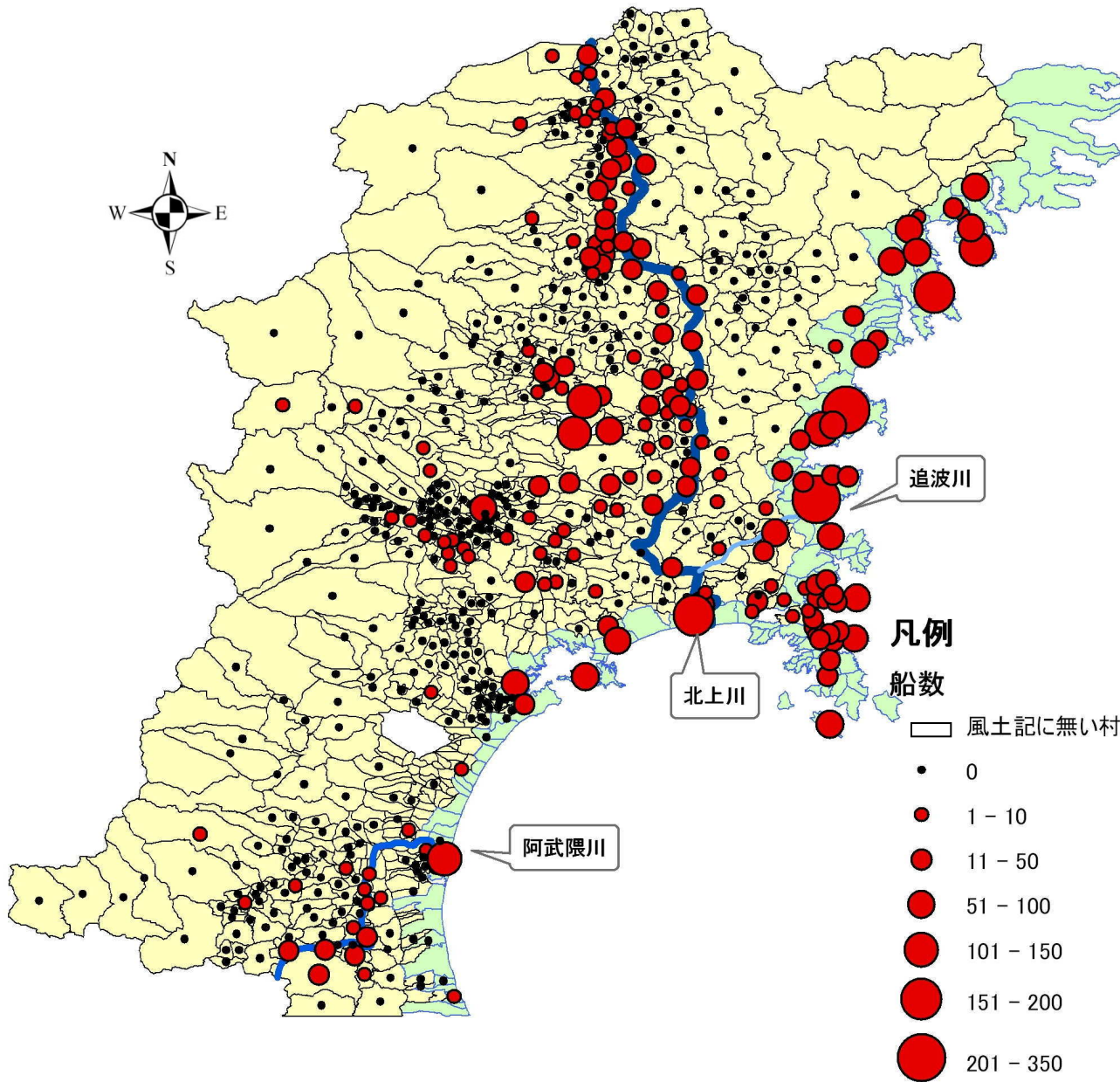


男: 人

女: 人

風土記に無い村, データ欠如

磐井郡各村の性比



* 海岸沿いの主要漁港のある村と北上川や阿武隈川などの主要河川沿いの村に多数の船が所有されているばかりでなく、2級河川や平野部の諸村でもかなり船が利用されていた。

- 凡例
- 船数
- 風土記に無い村
 - 0
 - 1 - 10
 - 11 - 50
 - 51 - 100
 - 101 - 150
 - 151 - 200
 - 201 - 350
- 海岸
- 海岸沿いの村
 - 海岸沿いでない村
- 河川名
- 北上川
 - 追波川
 - 阿武隈川

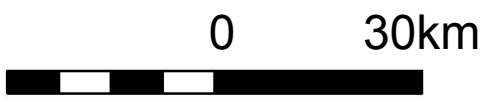


図16 船の分布

お年寄りからの聞き取り

- 子供のときの遊び
- 戦争体験
- 伊勢湾台風
- 家族



きがは便郵

愛知縣西加茂郡
藤岡村字業一色
生田 静子 様

北支隊遺棄者の三四部隊
理文以隊 千尋様

郵便 軍事

きがは便郵

愛知縣西加茂郡
藤岡村字業一色
生田 静子 様

北支隊遺棄者の三四部隊
飯塚隊の千尋様

郵便 軍事



前略 其の後由無沙汰しました。元氣で勉強の事と思ひます。又 初芽科多卒業古目虫度、お母さんの病氣はよくなりましたね。親への精進忘れぬ様。人生は三九かかん。一ツありは勉勵の程を戦は三九かかん。

佐健康と佐奮斗一ツを祈りまー

乱筆にて 失礼

前略 長い間由無沙汰致す之を禮相書せず元氣で居ると思ひます。初六に付て國成る後の本で十を預帳とありと思ひます。味傷は悪もなき。為給の當年一審問下にお母さんの病氣は如何子の。今、之の思ひに懐かしく一お母さん存じなくも体にはいささか弱弱と云ふ。お家の人がよろしく

撮影：溝口（肖像権はすべて承諾済み）

- 民話「桃太郎」がおかしい

「むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。

おじいさんは山へ……………

おばあさんは川へ……………

- ワラ草履で遠足に

- 千賀馨先生：涙がでたよ。いくら子供でも。

こんな先生もあるもんだと。

過去帳との出会い：因島2006.8.18



中国新聞 2005.8.19



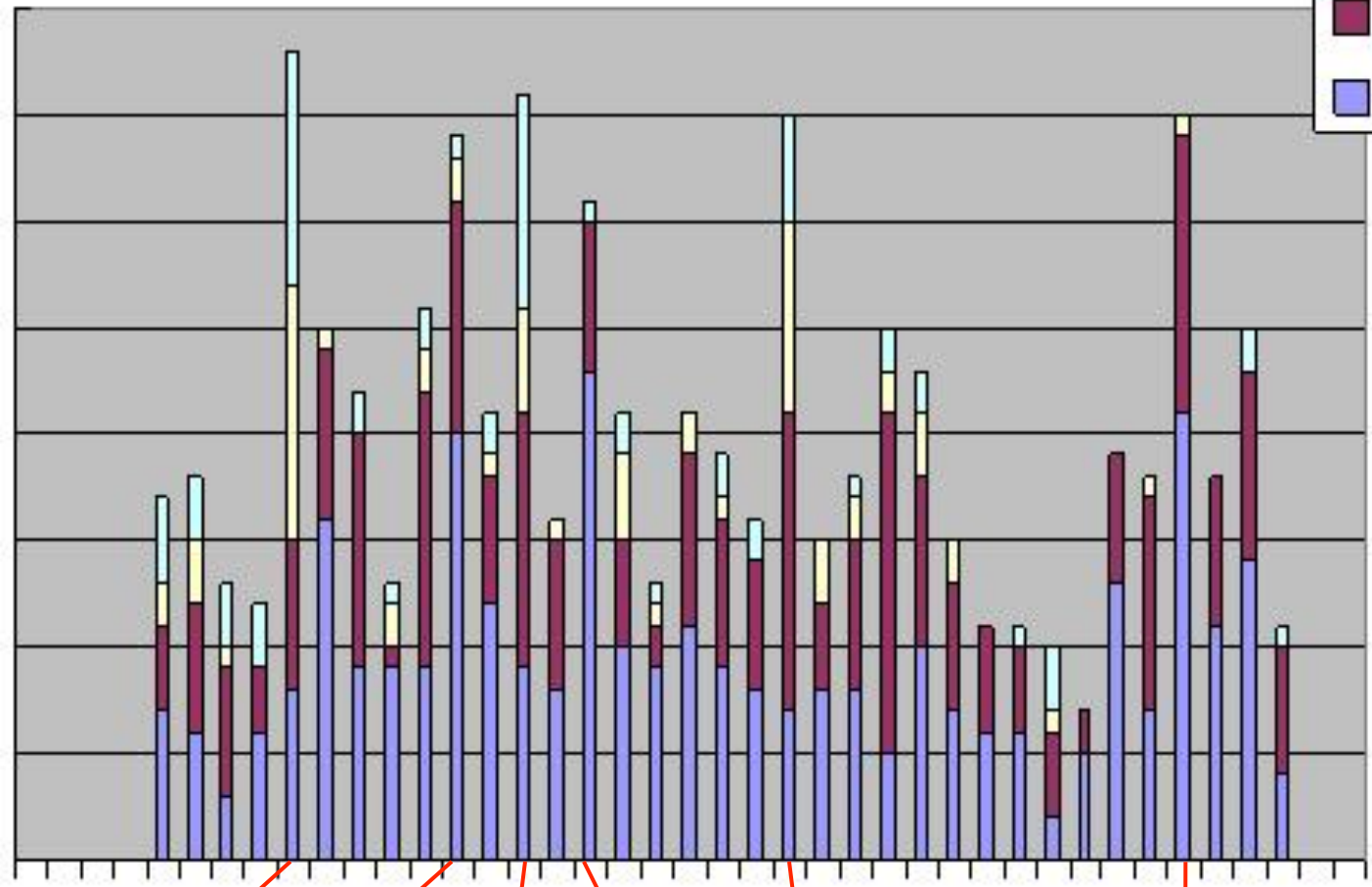
加藤住職にインタビュー

棕之浦死者数

人

40
35
30
25
20
15
10
5
0

- 童女
- 童子
- 女
- 男



1825 1830 1835 1840 1845 1850 1855 1860 1865 年

天保4年(1833)・9年(38)・11年(40)・13年(42) 嘉永元年(1848) 万延元年(1860)

5. 死亡原因と性比

- 死亡原因は、通常之死因以外において疫病と飢饉と水死が大きかったことが図1によってわかる。過去帳には年齢は記載されていないが、童子(15歳未満)、童女、信士、信女の区別があるので、子供の死亡状況が分かる。天保4年、11年、嘉永元年の**童子・童女の死者数は異常**である。これは明らかに疫病(はしか、疱瘡、消化器系の病気)で、前2者は天保の飢饉との関係が強いと思われる。

- そして、**水死(海難事故)**であるが、これは**椋浦独自の死因**であろう。漁民・海運業者の多い海村の宿命かと思う。天保13年、万延元年の信士(成人男性)の死者の多さは異常である。何故水死かということ、前者の12月4日には1日で14人もの死者がでており、何れも男性成人である。後者の閏3月29日でも、やはり男性成人ばかり15人の死者が出ている。かつ全員の戒名に「海」(1人だけ「舟」)の字が入っていることから、海難事故に遭ったものと断定できよう。図2の写真は「椋之浦過去帳」の万延元年のページである。

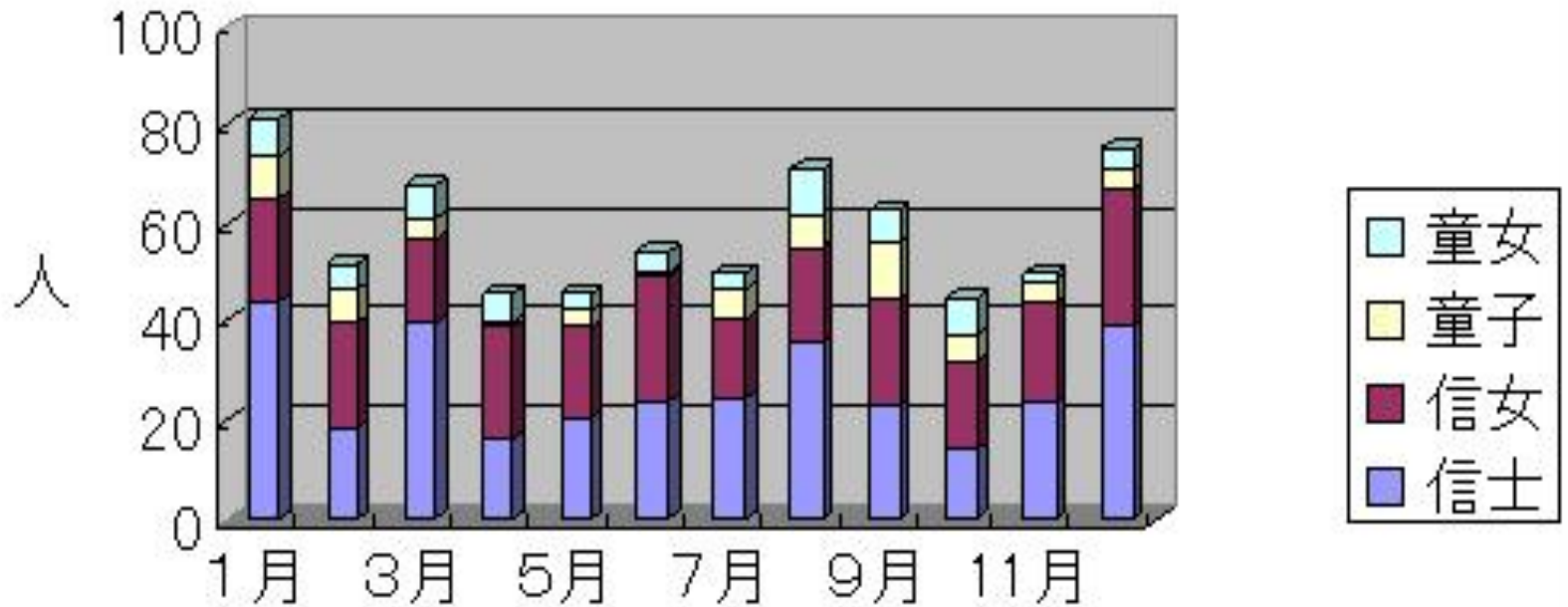


図3 棕之浦月別死者数(1829-1863)

月別の死者数を図示してみたが、(閏1月:1日、閏2月:1日、閏3月:18日、閏7月:2日、閏8月:1日、閏9月:2日が各月に含めてある)12月、1月の冬場と8月、9月の夏場に死者が多いのが特徴といえよう。冬の時化および夏の台風による海難事故死と思われる(図3)。

死亡者の年変化と月変化

- 図1をみると、1年ごとの死亡者数の差がありすぎる。この不安定さは近世村落の一般的な特徴なのか、海村の特徴なのか、あるいは椋浦だけの特徴なのであろうか。
- 大量に亡くなった次の年は急減している。集落規模が小さいから当然で、もう亡くなる人がいなくなったからといえる。
- そんな中で、1850年代半ばから子供(童女・童子)の死者数はほとんどなくなっている。これは嘉永2年(1848)に種痘が日本に到来し、疱瘡患者が激減したことと期を一にしている。おそらく衛生状態がよくなり在村医療に進歩がみられたものと思われる。疫病はなかったようだ。

* 小さな村で成人男性が一拳に命を落とすことが短い期間に2度も3度もあり、かつ疫病にも見舞われ多数の子供が犠牲になる年も何回もあったとなると「海村」の悲劇は平野部の農村の比ではなかったようである。小さな村の小さな事例かも知れないが、従来研究において海村の人口に関する報告はほとんどなされていないので、この「棕之浦過去帳」の分析結果は貴重な情報提供になるものと思われる。

2. 従来研究

- 上記のように過去帳研究は慎重を期するが、近年、公衆衛生学、地理学、日本史学、歴史人口学等の分野においてに貴重な成果があげられてきている。
- 須田圭三『飛騨〇寺院過去帳の研究』私家版(1973)
- 菊地万雄『日本の歴史災害－江戸後期の寺院過去帳による実証』古今書院(1980)
- 高木正朗編『寺院過去帳からよみとる江戸時代の飢饉－GISを使用した死亡変動分析』立命館大学高木ゼミ(2005)
- 菊地勇夫『飢饉の社会史』校倉書房(1994)
- 鬼頭宏『日本二千年の人口史』PHP(1983)
- 川口洋「『過去帳』分析システムの構築と活用－大都市近郊農村における民衆の死亡地－」情報処理学会研究報告, 2007, 49-56.
- 川口洋「武蔵国多摩郡の寺院で供養されている被葬者の出身地－『過去帳』分析システムを用いた史料検討－」人文科学とコンピューターシンポジウム要旨, 2007, 1-8.
- 渡辺理絵「近世農村社会における天然痘の伝播過程」地理学評論83-3, 2010, 248-269.
- 杉山聖子「近世後期から昭和戦前期の瀬戸内農村における死亡構造の時系列的分析: 広島県賀茂郡黒瀬村の寺院過去帳を事例として」『農業史研究』38、2004
- 太田未紗「寺院過去帳における死亡構造の分析: 佐渡島勝泉寺における一寺院の過去帳を事例として」日本女子大学2012年度卒論

そして、過去帳閲覧の旅を始めました。

9M慶寺 080625 礼文郡礼文町船泊
 10M香寺 080625 礼文郡礼文町大字香深村
 7M海寺 080621 利尻郡利尻富士町鴛泊
 8G正寺 080621 利尻郡利尻富士町鴛泊

11C徳寺 080924 能代市二ツ井町飛根
 12Z導寺 080924 北秋田市阿仁銀山
 13H華寺 080924 北秋田市阿仁銀山
 14E徳寺 080925 鹿角市花輪
 15D徳寺 080925 鹿角市八幡平
 16H光院 080925 鹿角市十和田
 17S覚寺 080926 大館市比内町
 18蓮荘寺 080926 大館市字大館

34K巖寺 130117 揖斐郡揖斐川町谷汲

1明德寺 050819 尾道市因島

21S光寺 090928 呉市下蒲刈町下島
 22R生寺 090928 呉市蒲刈町大浦

26K蔵院 120517 伊勢市小俣町
 5高泉庵 130119 伊勢市二見町江
 6大江寺 130119 伊勢市二見町江

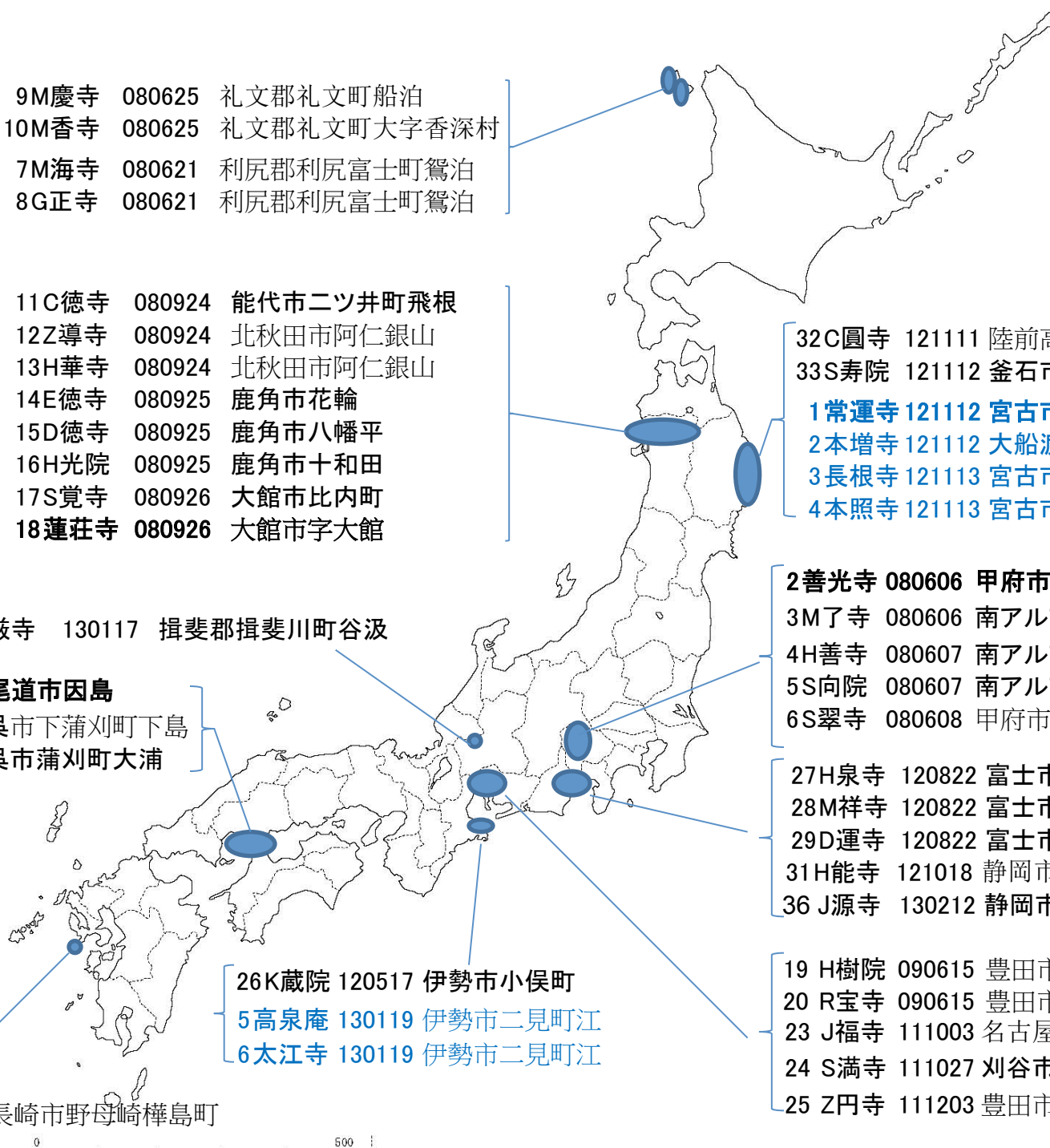
35M量寺 130125 長崎市野母崎樺島町

32C圓寺 121111 陸前高田市気仙町
 33S寿院 121112 釜石市大只越町
1常運寺 121112 宮古市田老
2本増寺 121112 大船渡市大船渡町
3長根寺 121113 宮古市長根
4本照寺 121113 宮古市愛宕

2善光寺 080606 甲府市善光寺
 3M了寺 080606 南アルプス市上市之瀬
 4H善寺 080607 南アルプス市加賀美
 5S向院 080607 南アルプス市宮沢
 6S翠寺 080608 甲府市上積翠寺町

27H泉寺 120822 富士市吉原
 28M祥寺 120822 富士市中央町
 29D運寺 120822 富士市中央町
 31H能寺 121018 静岡市清水区
 36 J源寺 130212 静岡市蒲原新田

19 H樹院 090615 豊田市葛沢町
 20 R宝寺 090615 豊田市川面町
 23 J福寺 111003 名古屋市中川区高畑
 24 S満寺 111027 刈谷市小垣江町
 25 Z円寺 111203 豊田市白川町





陸前高田の長円寺



釜石の仙寿院



大船渡の本増寺



宮古の長根寺

宮古市田老の常運寺



上の2枚: 宮古市編集・監修『写真特集 津波—Document2011.3.11—』宮古商工会議所発行、2011.9.1、34-36
下の2枚: 溝口撮影

関上、日和山より





雄勝町 流された津波記念碑

復興協力ヒント1

安政元年(1854)の津波で難破



加藤昭夫・中村勝芳・静岡県立吉原高等学校「世界の子どもを繋ぐ物語を作る会」『ディアナ号がやってきた! ~日本人とロシア人に生まれた心の絆~』富士市日口友好協会、2010.5.21 (表紙)

・復興協力ヒント1-2



静岡県富士市宮島村: 田子の浦の海岸の村

伊勢市慶蔵院



徳浄上人千日祈願の塔

むかし、一人の僧が勢州明野の庚申堂を
霊場(根城)として修行していたという。
天保の頃、村が大飢饉にみまわれ、悪疫
大流行、世情騒然となったとき、この僧が
村民の窮状を救わんものと伊勢両神宮に千
日の間、村民の無事息災祈願のため素足で
日参された。

その後、明野村は疫病もなく、盗難、火
災もなく平安に暮らすことが出来たという。
この僧の名を徳浄光我上人といい、千日祈
願の徳を称え、明野や宇治山田の人々が世
話人となって建立したものである。

裏面に満行、天保七年(一八三六)丙申年
三月廿九日とある。

一九九四年八月

伊勢市教育委員会



・天保飢饉(1833)、・腸チフス(1935)



谷汲山華嚴寺



江戸時代、全国各地で流行した伝染病を研究している名古屋大グループが、7の両日、県内5院を訪れ、当時亡くなった人の死に日時などを記した過去帳を調べた。内陸部の感染状況を把握するため、溝口俊成教授は「各地の感染状況をまとめて発掘していきたい」と話している。

名古屋大グループ
江戸時代の伝染病研究

県内寺院で過去帳を調査

内陸部の感染状況把握へ



住僧から過去帳の提供を受ける溝口俊成教授(中央)ら
—8日、善光寺

溝口俊成教授(中央)は、江戸時代、全国各地で流行した伝染病を研究している名古屋大グループが、7の両日、県内5院を訪れ、当時亡くなった人の死に日時などを記した過去帳を調べた。内陸部の感染状況を把握するため、溝口俊成教授は「各地の感染状況をまとめて発掘していきたい」と話している。

←山梨県甲府市善光寺
↓南巨摩郡富士川町S向院

↓徳川家康 ↓武田信玄が使った茶碗

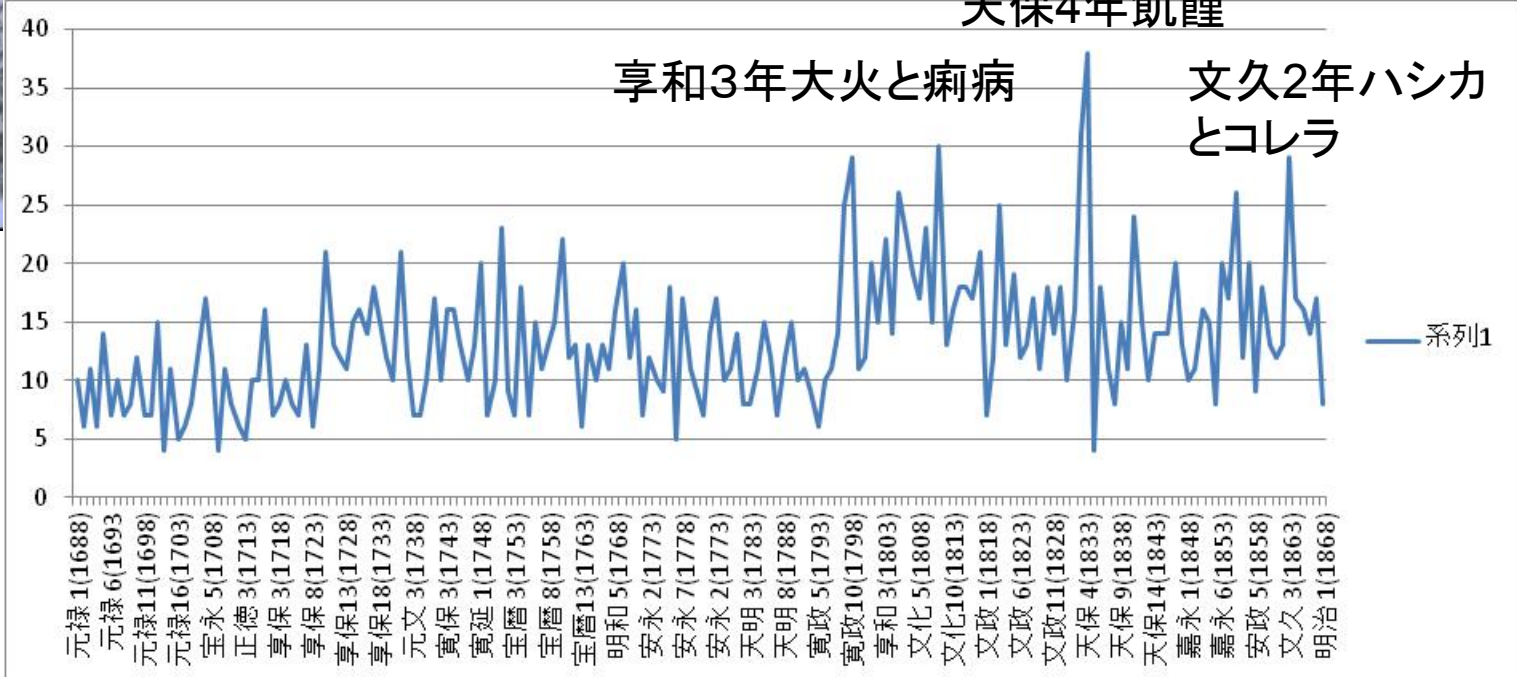


撮影:溝口

天保4年飢饉

享和3年大火と痢病

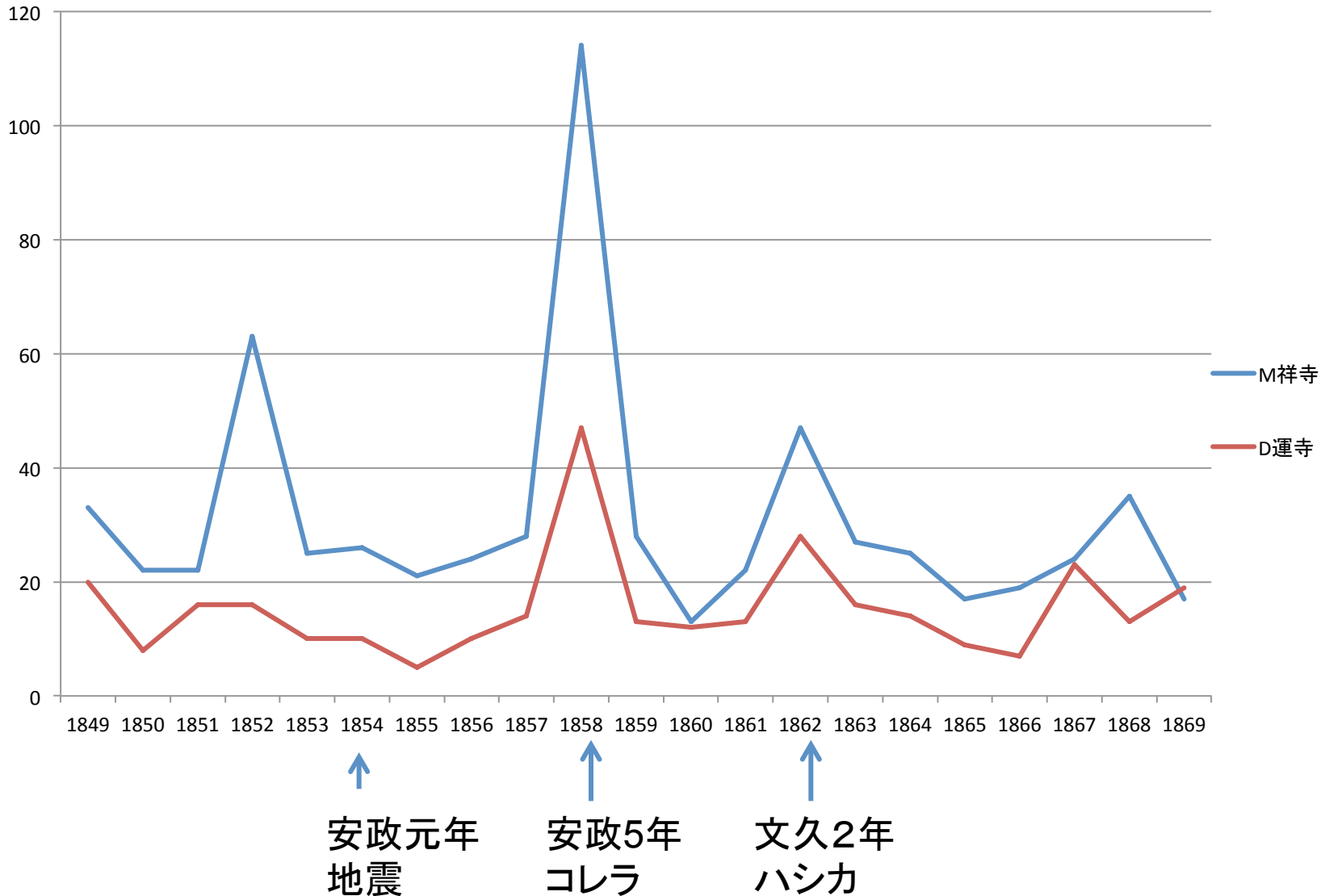
文久2年ハシカとコレラ



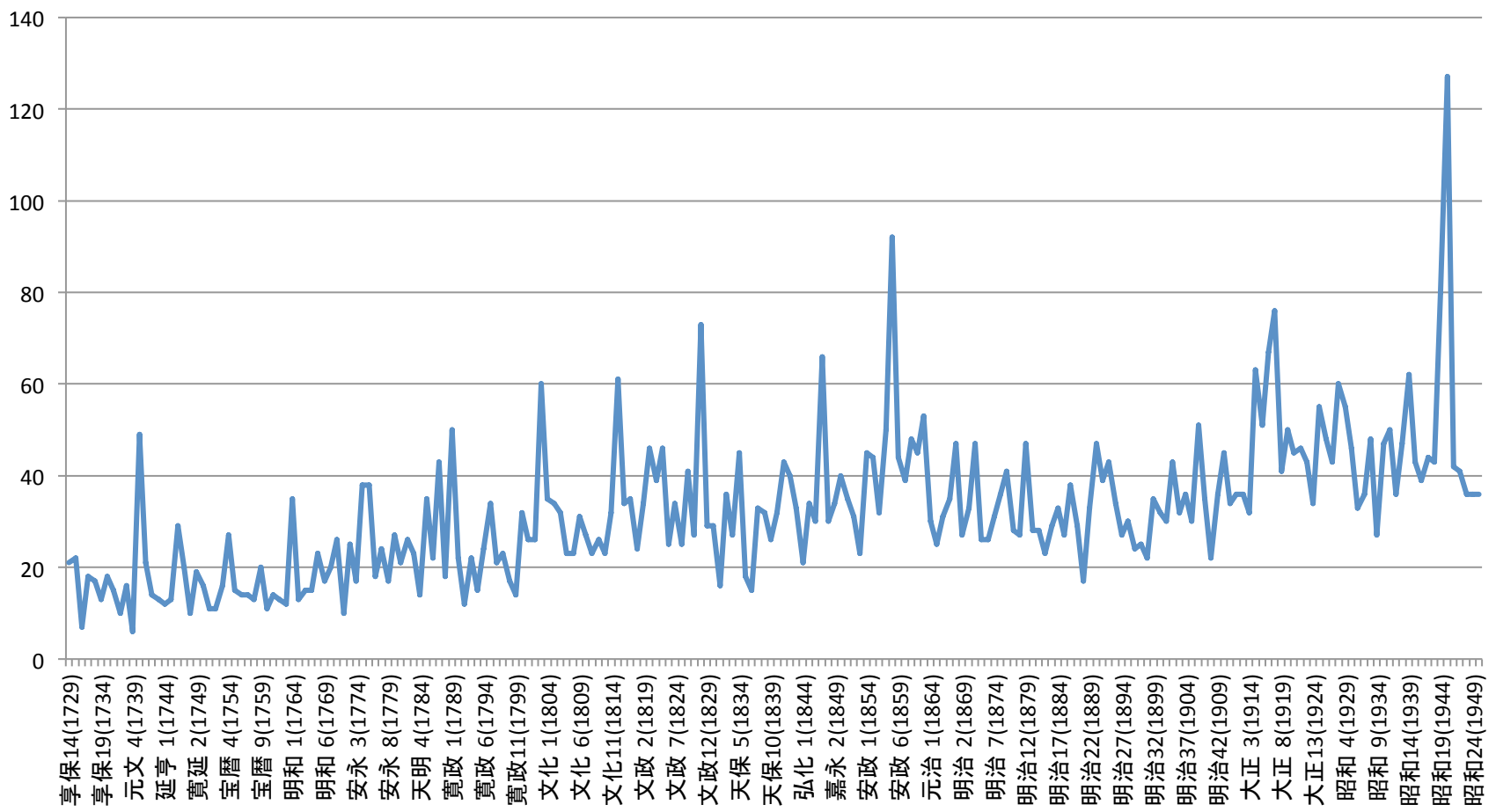
山梨日日新聞
2008.6.8



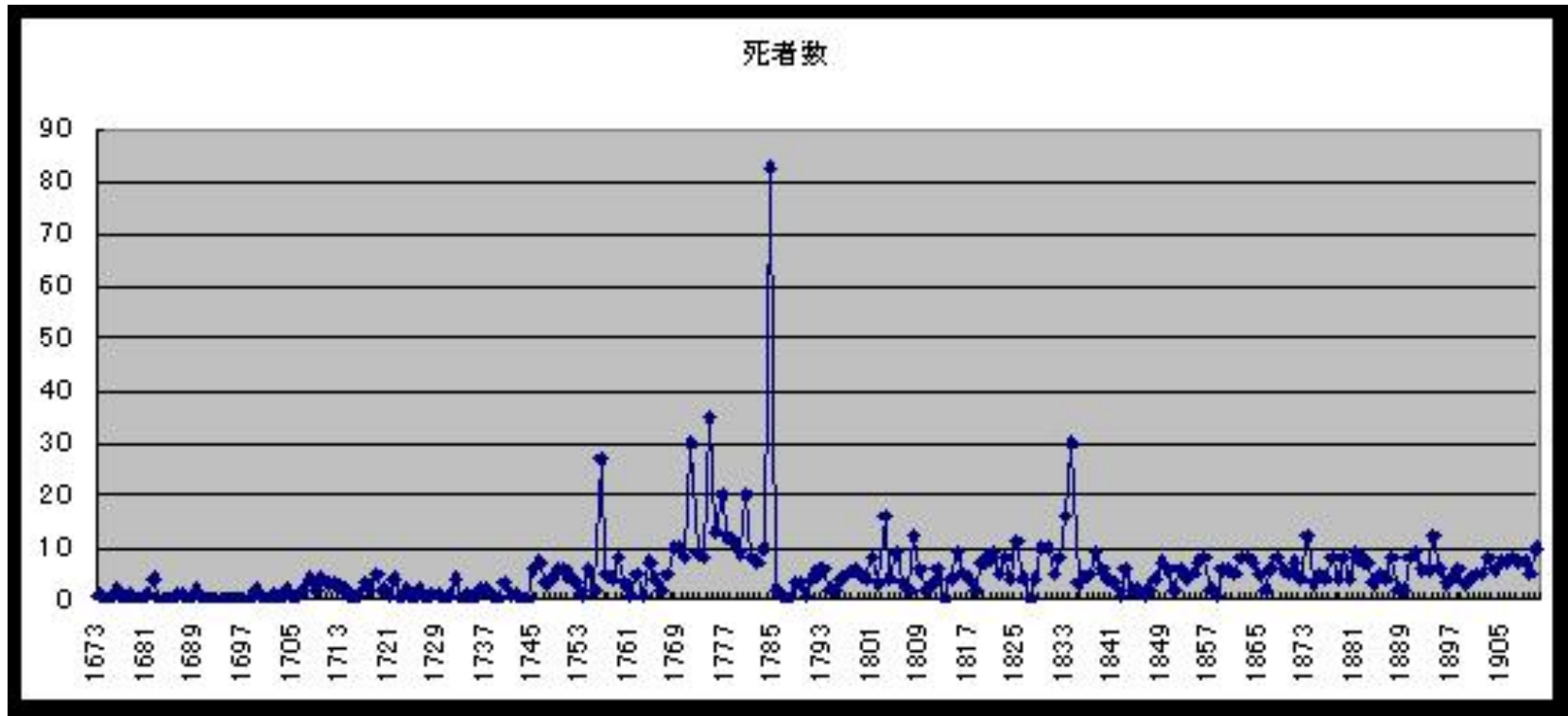
富士市吉原2寺の過去帳より



長崎県樺島MR寺の過去帳より



秋田県大館市S覚寺



・天明4年(1784)の飢饉 ・天保4年(1833)の飢饉

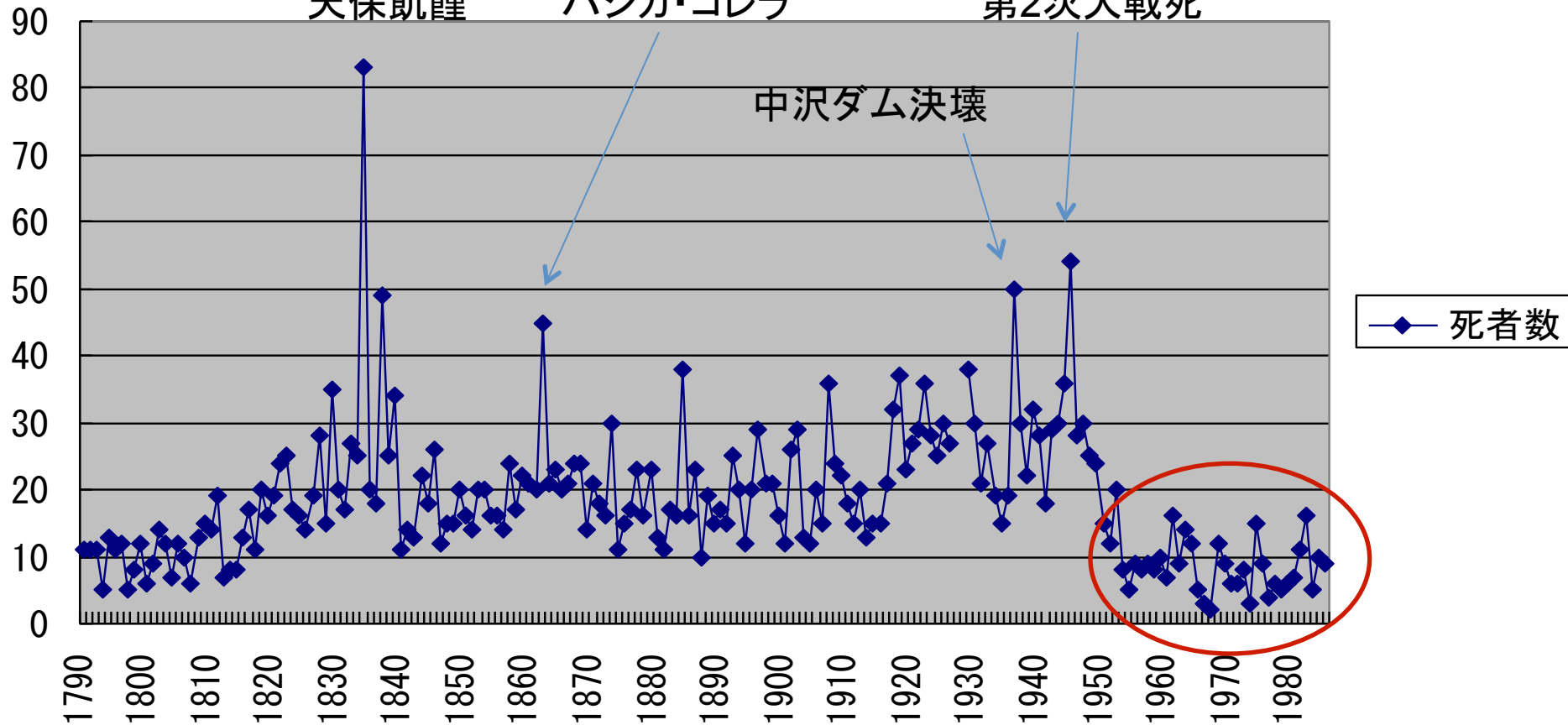
死者数

天保飢饉

ハシカ・コレラ

第2次大戦死

中沢ダム決壊



鹿角市花輪E徳寺

中間村の世帯構成

家族番号	名前	続柄	年齢	屋敷	田畑	家族番号	名前	続柄	年齢	屋敷	田畑
1.01	仁兵衛	家主	65	2/3	0/24	5.01	新兵衛	家主	43	4/6	4/22
1.02	*	妻	66			5.02	半右衛門	親	78		
1.03	伊勢	女子	35			5.03	*	妻	69		
1.04	南右衛門	子	29		6/24	5.04	六兵衛	兄	50		
1.05	犬まつ	04女子	4			5.05	源之丞	一	67		1/22
1.06	太右衛門	弟	60			5.06	*	05妻	66		
1.07	*	06妻	46			5.07	助左衛門	05養子	34		1/6
1.08	次郎	女子	28			5.08	丈	07女子	10		
2.01	嘉兵衛	家主	38	2/8	20/7	5.09	けさ	07女子	7		
2.02	*	妻	34			5.10	孝右衛門	07子	2		
2.03	鶴	女子	17			5.11	きく	07姪	5		
2.04	丈太郎	子	12			5.12	善吉	07叔父	73		
2.05	袈裟太郎	子	10			6.01	八左衛門	家主	40	3/27	8/12
2.06	丈菊	子	7			6.02	きくまつ	女子	4		
2.07	なべ	姉	44			6.03	*	母	74		
2.08	みつ	姉	40			6.04	藤兵衛	従兄弟	43		1/6
2.09	朔日	08女子	12			6.05	長左衛門	04子	10		
2.10	*	母	73			6.06	次郎左衛門	一	49		7/6
3.01	与右衛門	家主	47	2/0	3/3	6.07	*	06妻	44		
3.02	*	妻	47			6.08	次郎八	06子	14		
3.03	源左衛門	兄	49			6.09	乙丈	06女子	9		
3.04	*	03妻	43			6.10	かな	06女子	4		
3.05	半左衛門	子	18			7.01	七左衛門	家主	42	2/12	9/25
3.06	平作	養弟	43		14/18	7.02	袈裟太郎	子	15		
3.07	*	06妻	37			7.03	犬	女子	11		
3.08	与市	06子	14			7.04	たる	妹	39		
3.09	与兵衛	06子	11			7.05	まんけさ	妹	35		
3.10	五郎八	06子	8			7.06	彦市	05子	2		
3.11	次郎	06女子	4			7.07	*	母	70		
3.12	造右衛門	弟	35								
3.13	五郎	12子	14								
3.14	乙市	12子	4								
3.15	百	伯母	63								
3.16	*	母	71								
4.01	仲右衛門	家主	68	4/24	14/5						
4.02	朔日	女子	41								
4.03	半十郎	02子	23								
4.04	仲兵衛	02子	16								
4.05	弥左衛門	弟	57								
4.06	*	05妻	58								
4.07	丈	05女子	33								
4.08	八郎左衛門	05子	27		2/12						
4.09	豊鶴	05女子	23								
4.10	市	09子	2								
4.11	たる	05子	20								
4.12	豊鶴	11子	2								
4.13	きく	05子	14								



夫家庭



20-50歳
単身女性

●妻の居ない婚姻形態

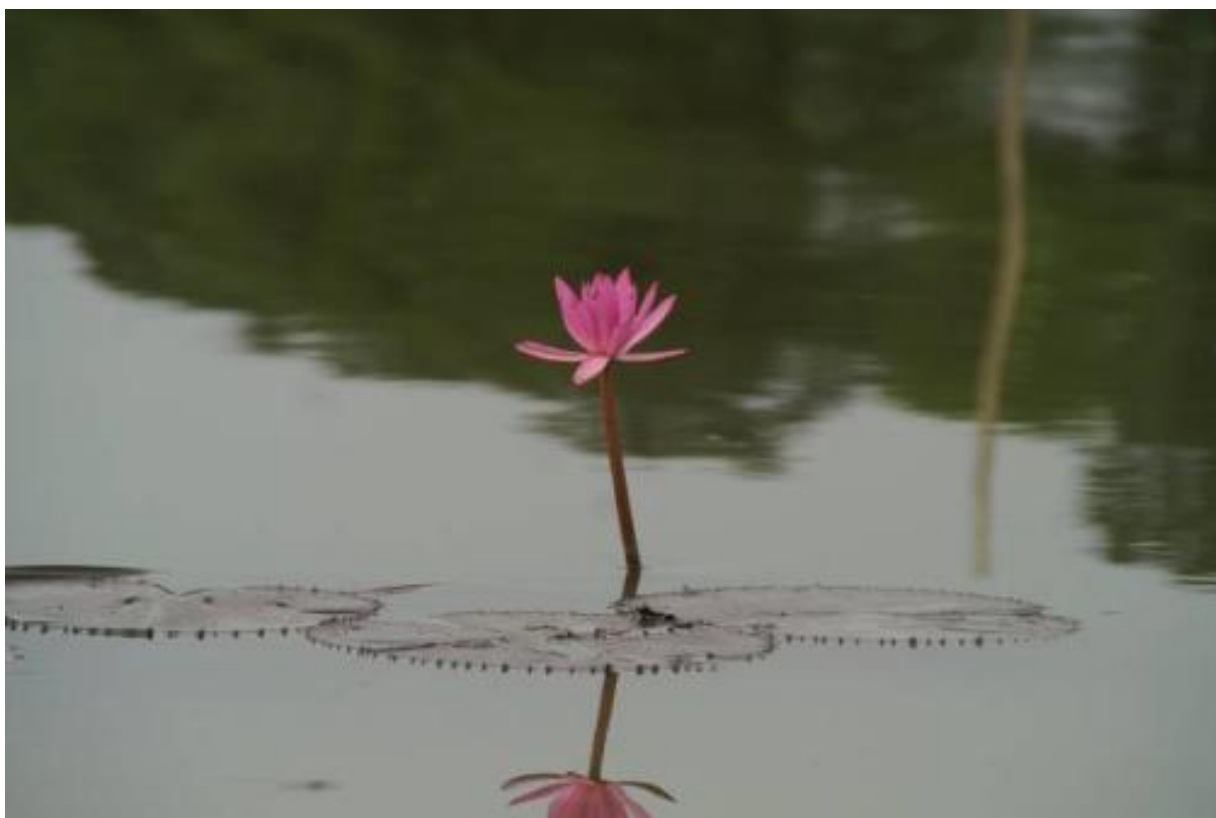
妻は亡くなっていたのではなく実家にいたであろう。

妻が夫と子どものもとへ通うという「夫問い婚」があったのではなかろうか。

ご清聴ありがとうございました。

このつづきは『歴史と環境』花書院2012.12
でお楽しみください。

2013.2.22溝口



撮影: 溝口

シャプラの咲く村: 名大生たちのバングラデシュ